

みちしるべ NO. 19

学校教育目標「自分から行動できる子・すすんで学ぶ子・たすけ合う子・きたえる子」



学びあい 支えあい 高めあい 笑顔あふれる学校
優しさと厳しさと温かさで
子どもを鍛え、育む地域の学校を目指して



独学する心 ～二宮金次郎の像をみつめて思う事～ 校長 川島 正晴

まん延防止等重点措置が延長となり、変わらず厳しい感染症対策を実施する中でも、子どもたちはマスク着用をしっかりと守り、学年末に向かって学習・生活を充実させています。2月9日(水)には「公開授業研究会」をオンラインで実施し、指導者の方々から、「子どもたちが聴き合い、対話し、自分の学びに没頭している」「漢字・計算などの繰り返し学習と学び合いによって鍛えられている」とお褒めの言葉をいただきました。



学校には、旧校舎から運んできた「二宮尊徳像」があります。立教大学教授・前田秀樹さんは、二宮金次郎に関わって、「独学する心」について、中学生に向かって次のように言っています。「金次郎のことを君たちはどう思うだろう。彼もまた私たちとまったく同じ命を持った<人間>である。では、どうして私たちは金次郎のようにふるまえないのだろうか。このことをよく考えてみたほうがいい。まず、君たちは金次郎のように自分で選んだ一冊の本を一人で繰り返し、読むことができるか。何に代えてもそれを読み続けようとする志を持つことができるか。金次郎にはできた。なぜだろう。彼の心は、子どもの頃からすでにじゅうぶんに独立していたからである。独学する心が火のように燃えていた。<中略>身と心に限界があることは、大切なこと、なければならないことではないか。独学することは、この限界のうちにしっかりと自分を据えて生きる覚悟をする、ということである。そこから学ばれることは、必ず独学になる。」(前田秀樹「独学する心」『何のために「学ぶ」のか』ちくまプリマー新書,2015、pp.47-48.より)



江戸時代の終わり頃、二宮金次郎は農家に生まれましたが幼い頃に両親がなくなります。叔父の家に預けられて学校に行けませんでした。こっそりと『大学』という儒学の教本を手に入れて、薪を背負いつつ繰り返し読んで勉強を続けました。貧しいが、どうするか。金次郎は故郷に帰り、黙々と畑を耕して農地を増やし、豊かになっていきました。昭和の初めに文部省は「金次郎の姿を示すことで、学校に行って勉強できるのはありがたいこと、感謝して励みなさい」と全国の学校に二宮尊徳像を建立させたと言います。

権小にある像は「皇太子御生誕記念」とあり昭和8年に建立されたと考えられます。金次郎に見守られ、権小の子は代々勉強に励んできたのです。「独学する心」を持ち、学び続ける子を育てる。ご支援御協力をお願いします。